彼は彼女を救えるか

八神大輔

「これが……最後のデートだね」
かすかに微笑んでそう云った彼女の瞳には、涙の雫が浮かんでいるように見えた。
けれど、確かめようとしたときには、もうその姿は人波の中に消え失せて――。
ふたりの季節が、終わった。

第一話　僕と生きることが君のしあわせ

「えーっ、今度の日曜もダメなのかよ」
『ごめんごめん、ゼミの用事が入っちゃってさ……』
『先週もそんなこと云ってたじゃん』
『だからごめんって。やっぱりさ、購買のヘルプで一カ月近く休んじゃったのが、かなり堪えてるのよね～』
　智也は膨れっ面で天井を見上げた。電話の子機を持って、ベッドに横になったまま小夜美と電話で話していたのだ。
　受話器の向こうからは、まだ申し訳なさそうな小夜美の声が聞こえている。しょうがないことだと、わかってはいるのだが……。
『ほんっとごめん。この埋め合わせは、必ずするから……』
『先週の分もまだしてもらってないけど……。まあ、いいや。わかったよ、もう』
『ごめんね、来週は絶対空けるから……』
　そのあとは、他愛もない話をして電話を切った。子機を枕元に置くと同時に、ため息が漏れる。
　……今日はまだいいほうなのだ。電話で話す時間が持てたのだから。
　智也の想像を裏切って、小夜美はかなり忙しい大学生活を送っていた。一カ月も大学を休むなんていうのは、大変無茶なことだったのだ。腰痛が悪化しても、無理をして仕事に出ようとする母を案じてのことだった。
　その間の遅れを取り戻すため、現在、小夜美はゼミの勉強やたまったレポートの消化に忙殺されている。
　そんなときだからこそ、自分が理解のあるところを見せなければ。こんなときに駄々をこねていては、いつまでも「弟」扱いのままだ。
　そう、わかってはいるのだが。
「……」
　ふと寝返りを打つと、カーテンを開けたままの窓が目に入った。すぐ隣の家の窓も。
（彩花は……いつでもそばにいてくれたのに……）
　そんなことを考えている自分に、愕然とする智也。
　彩花と比べて、どうするんだ。
　布団を頭までかぶって、智也はもう寝ることにした。
　寝つきのいいのが彼の取り柄だったが、しかし、こんなときに限ってその取り柄は発揮されなかった。

＊

　寝不足でぼーっとした頭で、智也は駅までの道のりを歩いていた。
　駅前で、所在なげに立っている少女が見える。智也に気がつくと、彼女は満面の笑みを浮かべて、大きく手を振った。
「とーもちゃーん。おはようっ」
「……おう」
　軽く答えただけで、智也はそのまま改札を抜けていってしまう。少女――唯笑も急いでそのあとを追った。
「なによぅ。今日はいつにも増して機嫌悪いのね。小夜美さんとけんかでもしたの？」

「……けんかするほど会ってないよ」
「……そっか……」
智也のそっけない回答に、唯笑は少しうつむいた。
智也が小夜美とつきあうようになってからも、唯笑は今までと変わらない態度で接してきた。朝はこうして待っていてくれるし、一緒に帰ることも多い。ただ何も変わらない「日常」があった。
「でもさ、小夜美さんも忙しいから、しょうがないよ」
「そんなこと、唯笑に云われなくたってわかってる」
ついぶっきらぼうに智也は答えてしまう。八つ当たりだ、と自覚しているからこそ、智也は余計にイライラした。
けれど、そんな智也に対して唯笑は、
「そっか、そうだよね」
そう云って笑うばかりだった。
その笑顔に甘えているということまでは、智也も気づいていなかった。
「じゃあさ、明日の日曜日も、智ちゃんは暇なの？」
「そういうことだ。夕べ、ドタキャンされた」
「それなら……さ、唯笑と……」
「ん……？」
少し赤くなって言いよどむ唯笑の顔を、智也が覗き込んだ。唯笑はもっと赤面して、智也から目をそらす。
「唯笑と一緒に……彩ちゃんのお墓参りに行かない？」
「彩花……の……？」
なぜか、心臓を鷲掴みにされたような衝撃を覚えた。
血の気が引いて、冷や汗が浮かんでくる。
彩花。
その名前が出されることを、自分はまだこんなに恐れていたなんて。
しかし、智也の様子に気づくことなく、唯笑は言葉を続けた。
「うん。小夜美さんとのこと、まだ彩ちゃんにちゃんと報告してないんでしょ？　ほんとは小夜美さんと一緒に行くのがいいのかもしれないけど……まあ、とりあえず、ね」
断る理由はなかった。だから、智也は頷くしかなかった。
「そう……だな」
「うんっ。彩ちゃんも、喜んでくれると思うよ」
弾けるような笑顔を浮かべる唯笑とは対照的に、智也は、断罪の席に引き出されるような感覚を味わっていた。

＊

その日は、雲ひとつない快晴だった。
彩花を失った日からは、想像もできない。あのときの激しい雨は、二度とやむことがないと思っていた。すべてが鉛色の雲に覆い尽くされ、かけがえのない人を失った痛みが、雨となって永遠に自分を打ち続けるのだと。
――しかし、時は流れ、やがて雨は上がり……。
「智ちゃん、どうしたの。さっきから空見てばっかりで」
「あ……ああ、なんでもない」
唯笑に促されて視線を下ろした先には、彩花の墓碑がある。
彩花は永遠に失われ、そして俺はまだ生きてこんなところに立っているのだ。
そのどうしようもない現実が、智也を打ちのめした。
「さ……智ちゃん」
墓碑の正面を譲り、唯笑が智也を促す。智也はゆっくりとその場所に立った。
「彩花……」
墓碑を見つめながら、声をかけた。

『彩花……俺は……』
その先は言葉にならず、智也はうつむいてしまった。
『智ちゃん……？』
唯笑が怪訝そうに智也の顔を覗き込んでくる。
しかし智也は答えることも、顔を上げることさえできず、肩を震わせるばかりだった。

＊

帰り道、智也と唯笑は終始無言だった。
唯笑を家の前まで送っていき、智也は「じゃあな」と手を上げて、帰ろうとした。その背中に、唯笑が声をかけた。
「あ、あの……智ちゃん……」
「ん？」
振り向くと、唯笑は目に涙を浮かべていた。思いつめた表情で、唇を噛んでいる。
『どうした？」
「その……ごめんね、今日は」
「なんで唯笑が謝るんだ？」
「うん……」
しばし顔を伏せたあと、唯笑は面を上げて智也の瞳を正面から見つめた。涙でいっぱいのその瞳を、智也は正視できなかった。
「大丈夫……だよね、智ちゃん」
唯笑……？」
「大丈夫だよね？」
それ以上は言葉にならず、ただじっと智也を見つめている。
強く頷いてやらなければならない。そう思ったのだが、智也は曖昧に笑うことしかできなかった。

「なに云ってんだよ、唯笑」
『智ちゃん……」
「じゃあな。また明日」
それだけ云うと、智也は歩き出した。唯笑の視線を感じながら、逃げるように、早足で。
（大丈夫だよね？）
唯笑の言葉が、耳に残っていた。
大丈夫だと、自分でも思っていた。彩花のことは思い出にして、新しい恋をしていけると。
だけど、本当は――。
『智也クン？」
ふいに呼びかけられて、顔を上げた。いつの間にか自分の家まで歩いてきていたらしい。
そして、玄関の前で佇む女性が。
「……小夜美さん？」
「そうだよー。せっかく急いで用事切り上げてきたのに、いないんだもん。どこ行ってたの？」
膨れっ面を作る小夜美。しかし目は笑っていたし、すぐ笑顔に戻った。
けれど智也は、その笑顔に笑い返すことができなかった。ずっとずっと逢いたかったはずなのに。
「……智也クン？」
智也の様子がおかしいことに、小夜美もようやく気づいた。
『どうしたの？　具合でも悪いの？」
熱でもあるのかと、小夜美が智也の額に手を伸ばす。だが智也は、反射的にその手を払ってしまっていた。
「……」
「……あ、ご、ごめん。なんでもないよ」
慌てて取り繕う智也だったが、どうにも気まずい空気が漂

っていた。
　しばしの沈黙のあと、小夜美がひとつため息をついた。
「……それで、どこ行ってたの？」
「唯笑と……彩花の墓参りに……」
「唯笑ちゃんと……ふーん、そうなんだ……」
「……なんだよ、その云い方」
「べっつに。無理して来なくてもよかったかなって思っただけ」
「勝手なこと云うなよ。もともとそっちが約束破ったんだろ」
「ひどい、そんな云い方。あたしだって……」
　逢いたかったのに、という言葉を小夜美は飲み込んだ。
　智也も、小夜美に逢いたかった。
　逢って、色々なことを話したかった。ふたりとも同じことを考えていたのに、どうしてこんな風になってしまうんだろう。
　どちらからともなく、ふたりは黙り込んだ。
　吹き込んだ北風に身を震わせると、小夜美は踵を返した。
「……帰るね」
「……」
　智也は何も云わない。ただ段々遠ざかっていく足音を聞いていた。

＊

　玄関のドアを後ろ手に閉めると、智也はドアにもたれてため息をついた。
　どうして、あんな態度を取ってしまったんだろう。
　苦い後悔が、胸を侵していた。
　彩花のことで動揺しているときに、思いがけず小夜美に逢ってしまい、素直になれなかった。
　――いや、素直になれなかったのではない。わざわざ逢いに来てくれたことが嬉しくて……同時に、つらかったから。
　なぜなら、俺は、まだ――。
　大きくかぶりを振って、智也はこみ上げる想いを振り払った。それは、考えるべきことではないような気がした。
　今日はもうしょうがない。明日、謝ろう。
　そう考えて靴を脱ごうとしたとき――、動きが、止まった。
　明日？　明日、逢えるかどうかもわからないのに？　声だって、聞けるかどうか。
　だからこそ、小夜美は来てくれたのだ。逢える時間を、大切にするために。
　そう考えたとき、智也はすでに閉めたばかりの玄関のドアを開けていた。
　今日、謝らなきゃ。
　小夜美のあとを追うために、急いで家を飛び出そうとする智也。だが、門前には――。
　息を切らせて立つ小夜美が、いた。
「小夜美さん……」
「……やっ。もしかして、迎えに出てくれるところだった？」
「……うん」
「惜しい。それなら、追わせればよかったな」
　小夜美はおどけて見せながら、照れたように笑う。小夜美が同じように考えて戻ってきてくれたのだとわかって、智也もようやく笑顔を返すことができた。
「寒くなっちゃった。上がってもいい？　お家の人、いないんだよね」
「もちろん。どうぞ」
　小夜美の手を握って、智也は家に入った。
　小夜美の手は、とても冷たかった。きっと智也の帰りを長いこと待っていたのだろう。

「……ごめんよ、小夜美さん」
「あたしこそ。大人気なかったね。ごめん」
そう云った小夜美の笑顔は、少し淋しげだった。彼女にそんな顔をさせたことで、智也は自分を責めた。
「俺が珈琲入れるからさ。座っててよ」
「うん。ありがと」
小夜美はソファに腰を下ろす。智也はインスタントの珈琲を手早く作り、カップを二つ持って小夜美の隣に座った。
小夜美が智也の体に寄り添ってくる。手と同じように、体も冷え切っていた。
智也はためらいがちに腕を伸ばし、小夜美の肩を抱いた。小夜美は目を閉じて、智也に体重を預けてきた。
そのまましばらく、ふたりは何も云わず、珈琲を飲みながら体を温めていた。
「……ねえ」
目を閉じたままで、小夜美が呟いた。
「なに？」
「今日……何かあったんでしょう？」
「……」
「話して……ほしいな。さっき云ってた……彩花さん、だっけ？　そのひとと……関係あるんだよね？」
智也は、小夜美に彩花の話はしていなかった。自分だけの問題だと、自分がひとりで乗り越えるべきことだと思っていたから。
しかし、今にいたっても彩花が智也の心に影を落としている以上、もう隠し通すわけにはいかなかった。
「そう……俺と唯笑には、もうひとり幼馴染がいたんだ……」

＊

智也ははじめから、すべてを包み隠さず話した。
物心ついたときから、三人一緒だったこと。
いつの間にか彩花を愛し、愛されたこと。
そして……彩花を失ったこと。
小夜美は瞳を閉じたままで、ただ黙って話を聞いていた。
「俺のせいで……彩花はいなくなってしまった……。ずっと……ずっと……そう思ってきた……」
智也の告白が終わる。小夜美はゆっくりと瞳を開いて、かすれる声で囁いた。瞳には、悲しみと、諦めに近い色があった。
「今でも……そう思ってるの……？」
「わからない……だけど……」
「自分ひとり幸せになる資格はない……そう、思うのね」
「小夜美さん……どうして？」
自分の気持を正確に言い当てられたことより、その口調の静けさに、智也は驚いていた。こんなに暗く、悲しく、沈んだ小夜美の声を、智也は聞いたことがなかった。
「あたしもきっと……同じように考えてたから……」
「……え……？」
「弟は……たった十五で死んだの……。あたし、何もしてあげなかった。何を考えているのか、わかろうとさえしていなかった。そんなあたしが……誰かを愛して……幸せにしてあげられるなんて……思えなかった……」
「小夜美さん……」
小夜美の瞳から涙があふれ、頬を流れた。
そして智也の顔を見上げ、微笑んだ。胸を切り裂かれるような、切ない笑みを。
「あたしたち、似たもの同士だったのかな」
「似たもの同士……？」

「そう……お互い、失ってしまったものの代わりを求めて……。あなたを愛することで、あたしは……贖罪をしているつもりだったのかも……。滑稽よね……ごめんなさい、智也クン……」

静かに呟き続ける小夜美の姿は、幼い少女のようにか弱げで、触れたら壊れてしまいそうに儚かった。

そんな小夜美を愛しく思う気持がこみ上げる一方で、智也の胸では先ほど考えまいとした想いが頭をもたげていた。

そう、今の自分は、彩花とのことを思い出にして、新しい恋をしていけると思っていた。だけど本当は――。

彩花の代わりに、そばにいてくれるひとがほしかった。

そうではないのか。

「違う！」

智也は口に出して叫んでいた。乱暴なほどに激しく、小夜美を抱きしめる。そして、もう一度、叫んだ。

「違う！　代わりなんかじゃない！　俺は、小夜美が……」

好きなんだ、そう最後まで云い切れなかったのは、嗚咽になってしまったからか。それとも……。

だが小夜美は、微笑んでいた。悲しみの只中にいながら、たったひとつ喜びを見出して。

「初めて……小夜美って呼んでくれたね」

「え……」

「嬉しい……、智也……」

「――小夜美！」

智也は、小夜美に口づけをした。むさぼるように、激しく。小夜美もまたそれに応えた。

「小夜美……小夜美……小夜美……」

「智也……」

「小夜美……好きだ、小夜美……、愛してる……」

「ありがとう、智也……。あたしも……愛してる……」

繰り返される口づけと愛の言葉。固い抱擁。

そこに嘘はなかった。

けれど、強く抱けば抱くほど、互いの唇をむさぼるほど、切なさだけが胸を浸していく。そんなもどかしさが、ふたりを放さなかった……。

第二話　なみだの意味

屋上のベンチに横になって、智也は冬の空を見上げていた。
今日もまた、雲ひとつなく晴れ渡っている。その蒼さが、目に染みた。
（あたしたち、似たもの同士なのかな）
小夜美の言葉が、忘れられない。
お互いに、失ったものの代わりを求めていただけなのか。
そんなことはない。そう強く叫んで、小夜美を抱いたけれど……。
小夜美を愛しく想う気持ちが大きくなればなるほど、心の中の暗い空洞もまた、大きくなっていく気がする。あんなにそばにいたいと願ったのに、そばにいるほど、切なさが増していく。
「それは、きっと俺が……」
「俺が……なに？」
思わず口をついて出た言葉に反応があり、智也は飛び起きた。
「なっ……！」
「わあ、びっくりした。どうしたのよ、いったい」
そこには、目を丸くして立つ音羽かおるがいた。
そういえば、ここは彼女の指定席だった。迂闊だったな、と智也は内心考えた。
「なんだ、かおるか。驚かすなよ」
「驚いたのはこっちだよ。黄昏てるから、どうしたのかと思ったら」
「冬の空を見ていると、センチメンタルになるだろ？」
「そういう柄？」
呆れたようにかおるは肩をすくめる。だがすぐに真顔に戻り、心配そうに眉をひそめた。
「どうしたの？　最近、変だよ。今坂さんもなんか元気ないし」
「……なんでもないって」
「そうは見えないから訊いてるんでしょ。隣の私にも云えないの？」
冗談めかして云ってはいるが、本当に心配してくれているということは、智也にもわかった。しかし、だからといって打ち明けるには、あまりに重過ぎる問題だった。
黙りこんでしまった智也の姿に軽くため息をつき、かおるは智也の隣に腰を下ろした。
「小夜美さんと、うまくいってないの？」
「……」
智也はやはり答えない。かおるは肩をすくめて、さっきまで智也が見上げていた空に目を向けた。
「小夜美さんがこの学校に来てたのって、すごく短い間だよね。その間に出会って、恋をしてって……なんか、ものすごい運命的じゃない？　映画みたいなそんな話、ほんとにあるんだって、私、ちょっと憧れてたんだ」
「……」
「……ま、私としては、転校生と恋に落ちるパターンのほうがよかったけど」
その呟きは小さすぎて、智也には聞き取れなかった。

「え？」
「ううん。だからさ、頑張りなよ。せっかくドラマチックに始まったんだから、盛り上げなきゃ」
購買でパンを取り置きしてもらったり、伝票整理を手伝うのがドラマチックなんだろうか、と考えて、智也は苦笑した。
だけど確かにあのときは、幸せだった。その笑顔が見られるだけで胸が満たされたし、そばにいて、その香りに触れるとドキドキした。
「……ドラマみたいには、いかないさ」
薄い笑みを浮かべて、智也は呟いた。その横顔を、かおるは悲しげに見つめた。
「それは、出演者次第だよ」
「……え？」
「――私、もう行くね。視聴者をあんまりがっかりさせないでよ」
智也から顔を背けるようにして立ち上がり、かおるは歩き去った。
ひとり取り残された智也は、再びベンチに寝転がって空を見上げた。
予鈴が鳴るのが聞こえたが、教室に戻る気にはなれなかった。
「運命的……か」
かおるの言葉を反芻する。
なにが運命なのだろう。
小夜美に出会えたことか。
……それとも、彩花を失ったことか。
これ以上、空の蒼さを見つめていると涙が出てきそうだったので、智也は固く目を閉じた。

＊

結局、智也は午後の授業をすべてサボってしまった。かおるや唯笑と顔を合わせづらかったので、下校時間まで屋上で過ごしていた。
すでに日も落ちた暗い夜道を、ひとり歩いて帰る。
誰も待つ人のいない家――のはずだったが、今夜も、玄関前に立っている女性がいた。
「……小夜美」
「あ、お帰り」
うつむいていた小夜美が顔を上げ、笑顔で迎えてくれる。しかしその笑顔は、以前、購買で見ていたものとは違うように、智也には思えてしまった。
「どうしたんだよ、いったい」
「どうしたはご挨拶ね。せっかくご飯作りに来てあげたのに。嬉しくないの？」
「そりゃ嬉しいさ。だけど……」
智也も、ぎこちない笑みを浮かべる。
どこか白々しい間があることに、ふたりとも気づかない振りをしていた。
智也が鍵を開けて、ふたりで家の中に入る。
小夜美はまっすぐ台所へ向かい、手にしていた袋から食材を出して、早速準備を始めた。
智也は上着をソファに投げ出しつつ、そんな小夜美を見つめた。
「大学のほうは、大丈夫なのか？」
「……うん、なんとかね」
「無理するなよ」
「ありがと。でもね、やっぱりちょっと反省したの。最近、あたし、自分のことばっかりで、智也のこと大事にしてなかったって」

「そんなこと……」
　小夜美の言葉に、智也の胸は痛んだ。わがままばかり云っていたのは、自分だ。それどころか、俺は……。
「だからね、少しでも一緒にいられる時間を増やしたいって、そう思ったの。あたしがそうしたいんだから、気にしないで」
「……でも、それじゃ小夜美の負担ばかり増えるじゃないか」
「そんなんじゃないよ。それに、あたしのほうが時間が自由になるから、ね。しょうがないよ」
「……」
　小夜美の思いやりに素直に感謝できない自分自身に、智也は心底愛想が尽きていた。けれどどうしても、「ありがとう」という一言が云えなかった。
　智也がうつむいて沈黙してしまったことに気づき、小夜美は調理の手を止めて振り返った。
「どうしたの、智也？」
「……やっぱり、おかしいよ、小夜美だけが不自由を我慢するなんて」
「だから、今はしょうがないよ」
「今は？　じゃあ、いつになれば対等につきあえるんだ？　来年は俺は受験、再来年は小夜美は就職活動、そのあとは小夜美は社会人で、俺はまだ学生……。いつまで経っても、同じ立場になんか立てないじゃないか」
　違う、こんなことを云いたいんじゃない。そう思いながらも、智也は止められなかった。
　小夜美が唇を噛んで、調理を再開する。
「それが……歳の差だよ。しょうがないことなの」
「そんな……」
「それが嫌なら……じゃあ……おしまいにする？」
　静かな一言だった。
　その一言に、智也は凍りついたように動けなくなった。
　小夜美も何も云わず、調理を続けた。
　やがて食卓に料理を並べると、小夜美はエプロンを外し、自分の鞄を取った。
「遅くなるから、帰るね。冷めないうちに食べて。洗い物は……悪いけど、お願いね」
　智也の目を見ずにそう云い残すと、小夜美は玄関に向かった。
　智也はまだ立ち尽くしていたが、ドアを開ける音で我に返り、玄関に走った。
「小夜美！　待ってくれ、俺は……」
　小夜美の腕をつかんで引き止める。
　ゆっくり振り向いた小夜美の頬は、涙で濡れていた。
　その悲しみに満ちた瞳に見つめられ、智也は、何を云う言葉もなかった。
　引き止めた腕から、力が抜けていく。小夜美がそっとその腕をほどいて、歩いていった。
　振り返らず去るその後姿を、智也はただ見つめるだけだった。

＊

　食卓に戻って、智也は箸を取った。
　小夜美の料理に口をつける。
（……うまい）
　どんな想いで、自分の帰りを待っていたのだろう。
　どんな想いで、この料理を作ってくれたのだろう。
　どんな想いで、夜道を帰っていったのだろう。
　どんな想いで……あの、涙を……。
　智也は肩を震わせて泣いた。
「バカだ……俺は……！」

何かが、壊れてしまった。かけがえのない、大切な、何かが――。

第三話　きみを変えられない，ぼくが伝わらない

冬の柔らかい日差しが差し込んでいた。
日曜日の昼下がり。智也は何をするでもなく、ただソファに座って時間を過ごしていた。
あれ以来、小夜美とは連絡を取っていない。もうじき一週間になるだろうか。
すぐに謝らなければ、と思ったのだったが、実際に小夜美を前にしたとき、なんと云えばいいのか。それがわからなくて、智也は動けなかった。
ただ、ごめん、と謝れば、小夜美は微笑んでくれるかもしれない。しかし、あの夜から――初めて彼女を「小夜美」と呼んだ夜から、その微笑みはどこか淋しげだった。口先だけで謝ったところで、その陰りをさらに深めるだけなのではないか。智也にはそう思えた。
あのとき、小夜美は云った。
「もう、おしまいにする？」
本心とは思えない。けれど、そう口にせざるを得ないほど、小夜美を追いつめてしまっていたのだ。それなら、それに対する答えを用意しなければ、どんな言葉もその場しのぎにしかならないだろう。
だから、俺は――。
「……」
そこで、いつも思考は止まってしまう。彩花のことを忘れればいいのか。忘れることができるのか。……そんなことが、許されるのか。
天を仰いで、深いため息をつく。そのとき、玄関のチャイムが鳴った。
「え……」
心臓が高鳴る。それでいながら、立ち上がることもできないでいると、もう一度チャイムが鳴った。
智也はようやく立ち上がり、玄関のほうに歩いていった。
もしかして……期待と不安におののきながら、ドアを開けた。
「おはよ、智ちゃん。起きてた？」
「……唯笑」
にこやかに笑う幼馴染みを前に、智也はふうっと息を吐き出した。それは失望より、安堵のほうが大きかったかもしれない。
「どうしたんだよ、急に」
「久しぶりにね、様子見に来たんだ。上がっていい？」
「あ……ああ」
少し戸惑いながら、智也は唯笑を招じ入れた。
そういえば、唯笑と話をするのも久しぶりだった。先日の彩花の墓参り以来、唯笑は朝、智也を待たなくなっていたのだ。学校でもほとんど顔を合わさず、帰りもいつの間にか姿を消していることが多かった。
「唯笑がお茶入れるね」
そう云って、唯笑が台所に立つ。カップを手に取って、それがもうひとつのカップとペアであることに気づいた。唯笑はそっとそれを元の場所に戻し、食器棚から別のカップを取りだした。

「お待たせ」
「ん……サンキュ」
　目の前に置かれたカップを手に取り、智也は一口飲んだ。なんとなく、落ち着いた気分になる。同じインスタントなのに、自分で入れたときと、小夜美が入れてくれたとき、そして今、唯笑が入れてくれたときで、微妙に味が異なるのはなぜなんだろう。
　そんな思いを感じながら、智也は冗談めかして感想を述べた。
「唯笑でも、インスタントコーヒーならちゃんと作れるんだな」
「失礼だなあ。料理だってもうちゃんとできるんだからね」
　ぷっと頬を膨らまして唯笑が答える。そういう姿を見ると、もうずっと昔から変わっていないようにしか智也には思えなかった。
「それはあまりにハッタリが過ぎるんじゃないか？」
「もう、バカにしてぇ。子供じゃないんだからね」
　智也は笑って取り合わない。だが唯笑は、沈んだ声で、もう一度同じことを繰り返した。
「子供じゃ……ないんだよ」
「唯笑……？」
　その声に智也が唯笑の顔を覗き込むと、唯笑は真剣な表情で唇を噛みしめていた。蒼白、と云ってもよかったかもしれない。
「いつまでも、子供じゃないの。時間はね、どんどんどんどん流れていっちゃうんだよ。どんなに立ち止まっていたいって思ってもダメなの。歩いて……行かなきゃ……」
　涙が、唯笑の瞳からあふれる。膝の上で握りしめた拳の上に、その雫がぽたぽたと落ちた。
「……唯笑……」
「智ちゃん」
　唯笑が顔を上げて、智也を正面から見据えた。涙でいっぱいの瞳で、まっすぐに。
「彩ちゃんは……もう、いないんだよ」
「……！」
　唯笑がその一言を口にするのがどれだけつらかったか、智也には、智也にだけはわかった。
　そして、そんなつらい思いをしてまで、智也に伝えたいことがなんなのかも。
　智也はうつむいて、両手で顔を覆った。
　わかってた。わかっていたんだ、そんなことは……。
　小さく肩を震わせる智也の背に、唯笑はそっと手を置いた。あの日と同じように。
　そして、囁いた。
「今日、ここに来たのはね、小夜美さんに頼まれたからなんだ」
「……え……？」
　思わず智也が顔を上げると、唯笑はいたわりと悲しみを湛えて微笑んでいた。
「電話かかってきたの。智ちゃんのそばにいてあげてほしいって、小夜美さん、そう云ってた。……あたしじゃ、ダメだからって」
「……」
　智也は茫然と目を見開いた。ゆっくりと、首を横に振る。
　そうじゃない。そうじゃないのに。
「……うん、唯笑にはわかってる。だから、早く行ってあげて。ね」
「唯笑……」
「小夜美さん、今日は大学の図書館にいるって」
　智也はすがるように、じっと唯笑の顔を見つめた。唯笑もその視線を正面から受け止め、強く頷いた。

智也は弾かれたように立ち上がり、着の身着のままで飛び出していた。

＊

智也は小夜美の大学までの道のりを駆け通しに駆けた。
本当のところ、はっきりとした答えはまだ出ていない。
しかし、唯笑から聞いた小夜美の言葉。
（あたしじゃ、ダメだから）
違う。そうじゃない。それだけは、どうしても伝えたかった。
ようやく大学の図書館が見えてくる。智也は門のところで立ち止まり、息を整えた。
そして門をくぐろうとしたとき、ちょうど小夜美が図書館から出てくるのが見えた。
「こ……」
呼びかけようとした声が、喉で止まった。
小夜美は、先輩らしい男と一緒だった。談笑しつつ歩いてくる。
穏やかな笑顔。小夜美のそんな表情を、智也はしばらく見ていなかった。ここしばらく、智也に逢うとき、小夜美はいつも悲しげだった。
そしてそれは――自分の、せいなのだ。
小夜美の言葉がもう一度よみがえる。
（あたしじゃ、ダメだから）
違う。そうじゃない。そうじゃなかった。
（俺じゃ……ダメなんだ）
俺は、あんな風に小夜美の笑顔を守ることができない。俺にできるのは、ただ彼女を傷つけることだけだった。
足下から崩れそうになった智也を支えたのは、けれど、小夜美の声だった。
『智也？』
門のところで立ち尽くす智也に気づき、小夜美は目を丸くして驚いていた。
『どうしたの、いったい？』
そのまま駆け寄ってこようとする。そう認めたとき、智也は小夜美に背を向けて走り出していた。
「――智也!?」
追いすがるその声を振り切ろうとするように、智也は無我夢中で走った。

＊

家に戻ると、鍵は開いていた。戸締まりもせずに飛び出したのだ。
ドアを閉めると同時に、深いため息が漏れる。そのままそこに座り込みそうになったとき、奥から足音が近づいてきた。
『智ちゃん？　お帰り、早かったね』
「……唯笑」
茫然と智也が顔を上げると、唯笑はいつものように屈託なく笑っていた。その笑顔から、智也は目をそらしてしまった。
『もう、智ちゃん、いきなり飛び出してっちゃうからさあ。鍵開けっ放しで帰るわけにいかないから、唯笑、留守番してたんだよ』
『そうか……悪い……』
『いいけど。でも、ひとりで帰ってきたんだ？　小夜美さん、まだ勉強忙しいって？』
「……」
逢えたんでしょ？」

「……」
『智ちゃん？』
唯笑の表情から、だんだん笑みが失われていく。
智也は何も答えることができず、うつむくだけだった。
『どうしたの？　何があったの？』
智也の肩をつかみ、唯笑が顔を覗き込んでくる。智也はどうしても視線を合わせられなかった。
『俺じゃ……ダメなんだ……』
「……え……」
『俺にはやっぱり……そんな資格……なかったんだよ……。誰かを幸せになんて……俺には……』
「……」
唯笑の手が、ゆっくりと智也の肩から離れていく。
数歩後ずさって、唯笑は智也の顔を見た。
睨んでいた、と云ってもいいかもしれない。
どんなときでも、唯笑が智也をそんな責めるような視線で見ることはなかった。けれど今は、怒りと、失望と、悲しみとを瞳に宿して、智也を見据えていた。
「……どうして……？」
涙が落ちる。抑えに抑えていた感情が爆発して、全身が激しく震えていた。
『どうして……？　また……同じことを繰り返すの……？』
『唯笑……』
静かな、しかし痛烈な響きを持つ声に驚いて、智也はやっと唯笑の顔を正面から見た。
智也の知らない唯笑が、そこにいた。
智ちゃんが……やっと彩ちゃんのことを振り切って、好きなひとを見つけられたんだって思ってたから……、だから、喜んであげなきゃって……、そう、思って……』
『唯笑……？』
『唯笑じゃダメなのは、わかってたから……。唯笑といると、どうしても彩ちゃんを思い出してしまう……。だから……』
「……」
『だから……智ちゃんが前に進むなら、唯笑もって……そう……思ったのに……。どうして？　どうして智ちゃんは、そこから動けないの？　あの雨の日から、時間は止まったままなの？』
「……」
長い沈黙があった。その重みに耐えかねて、智也が、ぽつりと漏らした。
『それが……俺の……罪だから……』
『罪……』
くりかえし呟くと、唯笑はもう一度智也を睨み据えた。
すでに、涙はなかった。
『うそつき。違うよ、そんなの』
「……え？」
意気地がないのを、彩ちゃんのせいにしないで！』
そう叫んで、唯笑は玄関から出ていった。
智也はただひとり、立ち尽くすだけだった。

＊

気がつけば、昼間の好天が嘘のように雨が降り注いでいた。
智也は公園のベンチに座り込み、雨に打たれていた。
あのあと、家にひとりでいることにいたたまれず、あてもなく街をさまよった。そしていつの間にか、彩花とよく来たこの公園に足を運んでいたのだ。
もう智也は何も考えていなかった。何も考えたくなかった。ただあの日と同じように、雨に打たれ続けていたかった。

そうしてどれぐらい時間が経った頃だろうか。誰かが智也に近づいてきて、傘をさしかけた。
柑橘系の香りが周りを包む。ゆっくり顔を上げると、長い髪が風に揺れて……。
「――彩花!?」
思わず叫びながら立ち上がりそうになり、人違いだと気づいた。
少し不思議な目の色をした少女が、驚いてこちらを見つめていた。
「双海か。……悪い」
「……いえ。どうなさったのですか？」
いつもの冷静な調子を取り戻して、詩音が訊いてきた。
智也は力無く首を振るばかりだった。
「なんでもない。……放っておいてくれ」
「そうもいきません。風邪を引いてしまいますよ」
「……」
「さあ、立ってください」
詩音が智也の手を取って、立ち上がらせようとする。
智也は逆らうでもなく立ち上がり――、意識を、失った。
懐かしい香りの中に倒れ込んでいく。
「――きゃっ。み、三上くん？」
智也の体重を支えきれず、詩音まで倒れそうになった。慌てて両手で智也の体を受け止める。傘が落ちて、地面に転がった。
智也の体は、火のように熱かった。
「三上くん？　しっかりしてください、三上くん！」

第四話　This may be the last time we can meet

暖炉の火がぱちぱちとはぜていた。
額にひんやりとした感覚を覚え、智也はうっすらと目を開けた。
誰かが額に乗せたタオルを交換してくれたのだ。
そのひとの長い髪が頬に触れ、くすぐったい感じがする。懐かしい、柑橘系の香り。
「……あや……か……？」
しかし、答えはきっぱりとした、冷ややかな声だった。
「違います」
「あ……」
ようやく意識がはっきりしてくる。智也の前にいるのは、いつも教室で見るときと同じように、硬い表情をした詩音だった。
『ごめん……ここは……？」
上体を起こそうとしたが、力が入らない。智也は首だけを左右に動かしてみた。
見たことのない部屋だった。暖炉のある、洋館風の作りのようだ。
「私の家です」
「え……？」
「三上くんが倒れてしまったので、やむなくここに運びました。三上くんのお家を、私は存じませんから」
智也もやっと思い出した。雨の中、詩音に会い、そこで意識を失ったこと。
同時に、唯笑の言葉、小夜美の涙も思い出す。

智也は暗い物思いを振り払うため頭を振ろうとしたが、激しい頭痛に見舞われて頭を抱えた。
「つっ……」
「すごい熱でした。まだ安静にしているべきです」
頭からずれて落ちたタオルを拾い、もう一度智也の額に当てながら、詩音は云った。
相変わらず表情はなく、口調も淡々としていたが、智也はその手つきにいたわりを感じた。
「すまない……。とんだ迷惑をかけたな……」
「いいえ」
詩音は小さく微笑んだようだった。一瞬、別人のように柔らかい表情になった詩音をもう一度見ようと、智也は首を動かしたが、そのときには詩音は立ち上がって電話のほうに歩いていた。
『ご自宅に、ご連絡しておかないといけませんね」
「……いいんだ、どうせ誰もいない」
「そうなのですか……。では……」
詩音は珍しく、少しためらった様子を見せた。
『今坂さんや……き……霧島さんに……」
彼女らの名を口にすることに、どうして詩音が動揺するのか、智也にはわからなかった。それどころか、そんなことを疑問に思う余裕すらなかった。
智也は目を閉じて、息を吐いた。
「いいんだ」
「でも……」

「いいんだ……誰にも……連絡しないでほしい。頼む……」
「……わかりました」
詩音はそれ以上は理由も聞かず、智也のそばに戻ってきて、椅子に腰掛けた。
智也は目を閉じたままで呟いた。
「もう少し……眠ってもいいか……？」
「そのほうがいいと思います。……おやすみなさい」
詩音の静かな声が、智也の今の心には、たとえようもなく心地よかった。

＊

深夜、左手の辺りに重みを感じて、智也は目を覚ました。
視線をそちらに向けると、詩音が椅子に座ったまま、ベッドにもたれて眠っていた。
智也を看病しつつ、そのまま寝てしまったのだろう。
なぜそうまでしてくれるのか疑問に思いながら、智也は詩音を起こさないようにそっと体を起こし、その肩にシーツを掛けた。
再び横になり、暗い天井を見上げる。
静かな夜だった。
雨はかなり小雨になったようで、ほとんど音も聞こえない。
このまま、こうして闇の中でひとり眠り続ければ、もう誰も傷つけることはない……。
そんなことを考えているうちに、智也の意識はまた闇に呑まれていった。

＊

雨は夜の間にやみ、翌朝には再び陽光が戻ってきた。
智也は残念そうに目を開ける。
必ず夜は明けて、時は刻まれるのだ。
歩いていかなきゃ、ダメなんだよ）
唯笑の言葉を思い出して、智也は深いため息をつく。
そこへ、紅茶の香りが近づいてきた。
「お目覚めになりましたか？」
智也が目を向けると、詩音がティーポットとカップをふたつトレイに乗せて、歩いてくるところだった。微笑んで智也を見つめている。その笑顔に、智也は胸が高鳴るのがわかった。
「あ……双海……、おはよう」
「おはようございます。……今度は、間違えませんでしたね」
その言葉の意味に智也は息を呑んだが、詩音はいたずらっぽい笑みを浮かべるだけだった。ベッドの脇の机にトレイを置き、椅子の上のシーツを取る。
「三上くんが、かけてくださったんですね。ありがとうございます」
「いや……俺のほうこそ……」
詩音は椅子に座り、カップに紅茶を注いだ。芳香が部屋中に広がっていく。微笑みつつ、智也のほうにカップを差し出した。
「どうぞ。……起きられますか？」
「あ……ああ、ありがとう」
智也は上半身を起こしながら、カップを受け取った。少し体がだるいが、頭痛もないし、寒気もしない。熱は下がったようだ。
智也はカップに口をつけて一口すすり、目が点になった。
「……うまい」
こんな紅茶は今まで飲んだことがなかった。自分が知っていた紅茶は、いったいなんだったんだろう？
「ありがとうございます」

微笑んで答えつつ、詩音もカップを手に取った。
こんな風に笑顔を絶やさない詩音もまた、智也の知らないことだった。
智也は胸の動悸を押さえながら、詩音に頭を下げた。
「その……ほんとにすまなかった……迷惑かけて」
「いいえ」
「それに……その……失礼なことも……」
「……」
詩音はカップを置くと、智也のほうに向き直った。先ほどまでの笑顔を消し、真剣な眼差しを注いでくる。
「あやかさん……でしたか。その方は、そんなに私に似ているのですか？」
「それは……」
曖昧にごまかすことも、目をそらしてしまうことも、智也にはできなかった。やや気圧されたように、詩音の瞳を見つめ返しながら答えた。
「いや……そんなことはない。ただ、髪の長さと……その……香りが……」
「香り……そうですか」
詩音は暗い面持ちでうつむき、ほう、と深いため息をついた。
「そのあやかさんと……何か、あったのですか？」
「……」
「……ごめんなさい。余計な詮索でしたね」
「いや……そうじゃない……」
智也は視線を窓の外に転じた。眩しい青空が広がっている。
彩花は……あの空の向こうにいるのだろうか？
「彩花は……もう……いないんだ」
「え……？」
「いないんだよ……」

初めて自身でその言葉を口にした。智也は詩音の前だというのに、涙を抑えることができなかった。
「俺のせいで……いなくなってしまった……。だから、俺は……動けないんだ……あのときの、あの場所から……ずっと……」
膝を抱えて嗚咽する智也を、詩音はじっと見つめていた。
そうして、一言、呟いた。
「……可哀想なひと……」
「え……？」
涙に濡れた顔を上げて、智也は詩音を見た。
同情されているのかと思った。
しかし、そうではなかった。詩音は険しい顔つきで、智也のことを見据えていた。
「あやかさんが、可哀想です。あなたの弱さを、自分のせいにされて」
「……！」
それは、唯笑に云われた言葉と同じだった。
（意気地がないのを、彩ちゃんのせいにしないでよ！）
償いをしなければいけない。智也はずっとそう思ってきた。
けれど、それは言い訳だったのか。傷つくことを、失うことを恐れるあまり。
そしてそれが小夜美を傷つけ、唯笑を傷つけた。
そのことがはっきりと、智也にもわかった。
――しかし。
たとえ言い訳であっても、彩花を忘れたくない、その想いもまた真実なのだ。そんな気持ちを抱えたまま、誰かを愛することができるのだろうか？
涙さえ涸らし、虚ろに空を見つめる智也。その手を、詩音の手がそっと包んだ。
振り向くと、詩音が目に涙を浮かべていた。

「そばにいる人を……大切にしてください」
「双海……」
「霧島さんも……今坂さんも……、音羽さん、稲穂さん、伊吹さん、……私だって……、みんな、あなたを大切に想っているんです。どうか……そのことを忘れないで……」
「……」
智也の頬を、もう一度涙が伝った。
本当に大切なものがなんなのか。このとき、智也はようやくわかったような気がした。
けれどそれは……遅すぎたのかもしれない……。

＊

「ねえ、もういっぺん乗ろうよ、もういっぺん」
「ええっ……もう三回も乗ったじゃないか……」
「小夜美、もういっぺん乗りたいの！　乗る乗る！」
渋る智也の腕を取って、小夜美はジェットコースターの順番待ちの列に四度並んだ。
並んでいる間も、ずっと小夜美は笑顔のままでしゃべり続けていた。ちょっと珍しいぐらい大はしゃぎしている。
そんな様子の小夜美に、智也はなかなか云うべきことを云い出せなかった。
詩音の家を出て自宅に帰ると、小夜美が玄関に座り込んでいた。
智也が茫然としていると、小夜美は憔悴した顔を上げて、微笑んだ。
「あ、お帰り」
「お帰りって……どうしたんだよ、小夜美？」
立ち上がろうとする小夜美に手を貸す。その体は、冷たく冷え切っていた。昨日、大学で見たときと同じ服を着ている。
「えへへ。こんなところで座り込んでたら、みっともないね。ごめんごめん」
「まさか……夕べから……？」
智也の問いかけに、小夜美は目をそらして答えなかった。伸びをして、体をほぐすようなポーズを取る。
「とにかく、中に入れよ。体、あっためなきゃ」
「ううん、いいの。それよりさ、遊園地行かない？」
「……遊園地？」
「そ。最初のデートで行ったマリンパーク。また行きたくなっちゃったんだ。いいでしょ？」
「いいけど……あ、でも、今日は……」
月曜日。平日だった。
「一日ぐらい学校サボっても平気だよ。今日はおねーさんが許可してあげる」
その強引さにはとても逆らえそうになかった。智也自身も、小夜美と早く色々なことを話したいと思っていたので、その誘いに乗ることにした。
そして、今、ふたりはマリンパークに来ている。平日で人手が少ないのを幸い、アトラクションを次々やっつけていく小夜美。智也は落ち着いて話す時間がとれないことに苛立つ反面、久しぶりのふたりきりの時間に自ら水を差すようなことはしたくない、という想いも感じていた。
もしかしたら、このまま何事もなかったように、またうまくやっていけるのではないか……そんな都合のいい想像をしてしまうほどに。
結局、夕日が西の空を焦がすのを眺めながらマリンパークを出るときまで、智也は大切なことは何も云えなかった。
「すっごい楽しかったね」
小夜美が変わらず笑顔のままで、智也に話しかける。

智也も笑顔で頷いた。
「そうだな」
微笑むと、小夜美は少し早足になって智也の前へ出た。
その後ろ姿が、なぜだか急に、智也には淋しげに見えた。
「……小夜美？」
「楽しかったあ……」
茜色の空を見上げて、小夜美がもう一度呟いた。
智也は意を決して、話し始めた。
「小夜美……夕べは……」
しかし。
「いいの」
「え……？」
「もう……いいんだよ」
智也に背を向けたままで、小夜美は静かに云った。
その声の響きに、智也は思わず足を止めてしまった。小夜美はそのまま数歩歩き、軽く振り向いた。
「これが……最後のデートだね」
かすかに微笑んでそう云った彼女の瞳には、涙の雫が浮かんでいるように見えた。
智也は、何かを云おうとした。云わなければならなかった。
しかし、実際には石と化したように動くことも、話すこともできなかった。
小夜美は二度と振り返らず、ゆっくりと歩いていった。
その姿が人波に飲まれて消えてしまったとき、ようやく智也の呪縛は解けた。
走り出そうとして、足がもつれて倒れてしまう。
地面にはいつくばったまま、智也は声を放って泣いた。
色も、音も、世界からすべての意味が消え失せていった。

第五話　Memories Off

朝はだいたい七時半ぐらいに起きる。珈琲とパンで手早く朝食をすませ、家を出るのが八時ぐらい。電車に乗って、学校にはホームルーム直前に到着する。授業にはほとんど身を入れず、終業後はまっすぐ帰宅する。

それが三上智也の日常だった。毎日繰り返される、代わり映えのない日々。

以前は駅前で待っていた幼馴染みが、今はいないことも。

隣の席の転校生と、あまり話さなくなったことも。

図書室に足を向けなくなったことも。

すべて、いつの間にか慣れてしまい、「日常」の一部になっていく。

……購買部を避けて、いつも遠回りすることも。

今日もまた、授業が終わるとすぐに智也は教室を出た。最近は信と遊ぶことさえ少なくなっていたが、それも心に止めるほどのことではない。

そんな智也を、昇降口で待っている少女がいた。智也の姿を認めると、長い髪をツインテールにした頭をちょこんと下げた。

「みなもちゃん？」

「こんにちは、智也さん」

みなもは相変わらず、太陽のように笑う。また最近まで入院していたはずだが、そんなことは微塵も感じさせなかった。その明るさと――強さに、智也は戸惑った笑みを浮かべた。

「どうしたの？」

「智也さんを、待ってたんです」

「……俺を？」

「はい！」

何の屈託もなく笑顔で答えるみなもに対して、智也の戸惑いはさらに深くなった。

……もう、放っておいてほしいのに。

そんな考えが、頭をかすめる。

しかし、みなもは智也の胸の内など知らぬげに、先に歩き始めてしまった。やむなく、智也はその後に続いて校庭に出た。

「さむーい。もうすっかり冬ですねえ、智也さん」

「あ、ああ、そうだな」

「あれえ？　どうしたんですか、智也さん。変ですよ？」

「変って……」

「？」

「その……みなもちゃんは、俺を待ってたんだろ？　なんで？」

居心地の悪さに耐えられず、智也は自分から切り出した。どんな話かは想像がついていたので、早く終わらせてしまいたかったのだ。もう、何を云われても、どうしようもないことだから。

だがみなもは、智也の瞳をまっすぐ見つめながら、予想外の言葉を口にした。

「それは……わたしが、智也さんを好きだからです」

「なっ……」

あまりに無邪気な告白に、智也は言葉を失った。一瞬、か

らかわれているのかと思ったが、そういう雰囲気でもないし、そもそもみなもは戯れでそういうことを云う娘ではない。
　みなもはただ笑顔を浮かべていた。
『好きな人と一緒にいたいって思うのは、当然でしょう？』
「……」
『好きなのに一緒にいないのって……、おかしいです』
「……」
　……そういうことか。智也は小さな吐息とともに、自嘲気味の笑みを浮かべた。
　その表情を見て、みなもは悲しげに眉をひそめた。
「……唯笑から何か聞いたのか？」
『さあ。どうでしょう』
『俺のことはいいんだよ。もう……終わったことだからさ』
「……終わってなんかいません。だって、始まってもいないじゃないですか」
「……え？」
　みなもは毅然とした表情で、智也のことを見据えていた。
　けれど次の瞬間には小さく微笑み、智也から目をそらして冬の空を見上げた。
　そして、静かに、呟いた。
『智也さん、わたし、あとどれぐらい生きられると思いますか？』
「……！」
　さりげなく吐かれたその言葉。その重さに、智也は今度こそ絶句した。
　これまで、みなもがそんなことを口にすることはなかった。ただひたすら今日を、明日を掴むことだけを願っていたのに。
「なに……を……云って……」
「わからないですよね。わからないんです」
　智也の気休めの言葉など、みなもは聞いていなかった。ただ冬の空を見上げながら、話し続けた。
『病院のベッドで寝てるとね、怖くてたまらなくなるんです。もうここから出られないんじゃないか……、もうこのまま全部なくしてしまうんじゃないか……って……』
　その自分自身の言葉に恐怖したように、みなもの全身は震えた。それでも懸命にみなもは言葉を続けた。
「でも、でもね、それで負けてしまったら、ダメなんです。そこで負けてしまったら……本当に全部全部……なくなってしまうの……。だから……だから、今日、頑張らなきゃ……。明日は、わたしのものじゃないかもしれないけど……、今日は、今このときは、わたしの……」
　嗚咽にむせびそうになって、みなもは唇を噛んだ。
　そんなみなもを、智也は思わず抱きしめていた。
「もういい……もういいんだ、みなもちゃん……」
　だが、みなもは智也の腕を振りほどき、その胸を繰り返し叩いた。大粒の涙をこぼしながら。
「よくなんかない！　智也さんはずるいよ！　まだなんにも始まってないのに！　智也さんと小夜美さんのキャンバスは、まだ真っ白なんだよ？　これから……ふたりで描いていかなきゃ……いけないのに……」
　みなもに打たれるまま、智也は立ちつくしていた。その頬もまた、涙で濡れていた。

＊

　校庭のベンチで、智也はひとり座っていた。
　あのあと――。
『ごめんなさい、ひとりで大騒ぎしちゃって』
　しばらくしてようやく落ち着いたみなもは、恥ずかしそうに頬を染めてうつむいた。

智也は首を横に振って、答えた。
「俺のほうこそ……ごめん。あんなこと……」
将来への不安を口に出すこと。それはどんなことよりみなもにはつらかったはずだ。こんな小さな体で、ずっとずっと耐えていたのに。
それでも、みなもは笑うのだ。
「平気です。じゃあわたし、帰りますね」
「あ……送っていこうか？」
「大丈夫です。……あんまり優しくされると……諦められなくなります」
「……え……？」
「えへへ」
みなもは笑う。目に涙をためていても。
「わたし、智也さんが好きです。嘘じゃないよ」
「みなもちゃん……」
「唯笑ちゃんも、そう。みんな、智也さんのこと大事に想ってるの。そのことは、覚えていてね」
振り向いて、みなもは小走りに去っていった。涙がこぼれ落ちるのを、智也に見せないために。
智也はそばにあったベンチに腰掛けて、空を見上げた。
（覚えていてね）
みなもの最後の言葉が、小さな棘のように胸に刺さっていた。
けれどそれは、後悔や失意ではなく、ただほんの少しの悲しみと痛みを伴っていて――。
「彩花……」
口に出して、その名を呼んでみる。
同じように、小さな痛みが胸に走った。
その痛みが、罪の証だと思っていた。その痛みを抱えたまま、誰かを愛することはできないと。

だが、そうじゃなかった。その痛みは、受け止めきれなかった真心の欠片。忘れることなんてできない。忘れる必要なんて……ない。
（小夜美のことも……いつか、こうして……）
そう考えると、今度もまた胸が痛んだ。
しかしその痛みは、もっと切実な、文字どおり身を裂かれるような痛み。
（いやだ）
智也は、心からそう思った。
みなもの云うとおり、まだ何もはじまっていないのに。
智也は立ち上がり、購買部へ向かった。そこへ行けば、自分の気持ちを確かめられるような気がした。

＊

購買部はもう閉店しており、おばちゃんも帰宅してしまっていた。
誰もいないその場所に佇み、智也は様々なことを思い出していた。
（あぁ、あなたが智也クンかぁ）
（そんなの間違えないよー！　それはちょっとバカにしてるよね。ねー？）
（ねね、あたし今度ご飯つくってあげよっか？）
（そうそう、放課後。ちょーっとだけ、頼みたいことがあるんだー……）
（来てくれたんだね。小夜美、うれしいっ）
（いわばビューリホー女子大生ってとこね）
（あら、遠慮しなくていいのに。智也クンもまあまあかわいいよ）
（……あとで電話するね）

気がつけば、智也の顔には笑顔が浮かんでいた。
懐かしい、というには、あまりに近すぎる日々。
あの頃、ただ小夜美に逢いたくて購買に通った。ほかの誰でもない。小夜美の、そばにいたかった。
そしてそれは、小夜美も同じだったはずだ。つきあいはじめてからも、あまり逢えない日が続いたけれど、だからこそ逢えたときの小夜美の笑顔は格別だった。
そんな笑顔で待っていてくれることが、何より嬉しくて……。
(誰かの代わりだなんて……バカなことを考えたのは……ただ……怖かったから……)
その笑顔がかけがえのないものだと認めてしまうことが。また同じ痛みを繰り返してしまうのではないかと。
だけど、そうではなかった。明日のことはわからなくても、今日は、ふたりのものだから。
智也は強い決意を面に表して、階段を上っていった。
小夜美に逢う前に、もうひとつ、やっておくべきことがあった。

＊

智也は、唯笑を捜していた。まだ学校にいるかもしれない、と思ってとりあえず教室に戻ると、想像通り、誰もいなくなった教室に、ひとり、座る唯笑を見つけた。
声をかけようとして、智也は気づいた。唯笑の肩が震えている。手には写真か何かを持っているようだ。
智也は後ろからそっと近づき、その写真を見てしまった。
そこでは、三人の子供が、幸せそうに笑っていた。一人の男の子と、二人の女の子が。
唯笑の涙の雫が、写真の上に落ちる。

智也は、静かに声をかけた。
「……唯笑」
「どっ……智ちゃん?」
唯笑が慌てて顔を上げると同時に、写真を隠そうとする。だが智也の表情から、すべて見られたと知り、うつむいた。涙を押しとどめようとするように、目を乱暴にこすった。
「ひどいよ……智ちゃん……。黙って見てるなんて……ひどい……」
『ごめん、唯笑……』
智也は、ぽんと唯笑の頭に手を置いた。そのまま優しく撫でてやる。いつか、唯笑がそうしてくれたように。
『ごめん、唯笑』
優しく微笑みながら、もう一度繰り返す智也を、唯笑は茫然と見上げた。
智也は微笑んだままで、呟いた。
『唯笑、俺……小夜美が好きだ』
智ちゃん……」
『小夜美のことが……好きなんだ』
智也を見つめる唯笑の瞳から、また、涙がこぼれた。大粒の涙が、止めどなく流れる。けれど唯笑は、輝かしい笑顔を浮かべていた。
「なぁに、今頃そんなことに気づいたの?　しょうがないなあ、智ちゃん」
「ほんっと……しょうがないな、俺は」
「ほんとだよ……。でも……よかった……ほんとに……」
『唯笑……』
唯笑は手にしていた写真に視線を落とした。笑顔の三人を愛おしむように、写真の表面を撫でた。
「よかった……。唯笑ね、この写真見ると、ほんとにつらかったんだ……。こんな風に過ごしていなければ、よかったのかな

って……。こんな時代がなければ……智ちゃん、苦しまなかったのにっ……て……」
また、胸がちくりと痛む。
智也は目を閉じて、想いを馳せた。
「……バカだな。この頃のことは……彩花のことはみんな……いい思い出だよ……」
「思い出……そう……そうだよね……」
唯笑は強く頷いた。
忘れることも捨てることもできない。だけどそれだけを見ていることもできない。それが思い出。
唯笑は涙を拭いて、微笑んだ。
「小夜美さんには、もう？」
「いや……まだ」
「もう……順番が逆じゃないの？　ほんっとしょうがないんだから」
「……彩花みたいな口の利き方だなあ」
「いいからっ。早く行っといでよぉ」
「はいはい。……でも」
ふっと、智也は暗い顔になった。唯笑の前では、どうしても迷いや弱さを隠せない。
「許して……もらえるかな」
その呟きに、唯笑は苦笑しながら肩をすくめた。そして鞄から何かを取り出し、智也に向けて差し出した。
「もう、まだそんなこと云ってるの？　そんなしょうがない智ちゃんに、唯笑からスペシャルなプレゼント！」
「……え？」
「マリンパークのチケットだよ。口実にはなるでしょ。みなもちゃんと行こうかって云ってたんだけど、特別にあげちゃう」
「唯笑……」
震える手で、智也はチケットを受け取った。

初めてのデートの場所。そして、最後のデート……と云われた場所。
そのことが、智也の背中に最後の一押しをくれた。
「ありがとう、唯笑」
「……ううん。頑張ってね、智ちゃん」
「おう」
笑顔を浮かべ、智也は片手をあげて教室を出ていった。
智也のそんな笑顔を見たのは、本当に久しぶりだった。だから、唯笑は……どうしても、泣いてしまった。
唯笑の恋が、本当に終わった日だったから。
「唯笑は……いつも笑ってなくちゃいけないのにね……。ごめんね、智ちゃん……。今日だけ……今だけだから……」
夕日の差す教室で、唯笑はひとり泣き続けた。

＊

小夜美の家は、学校のすぐ裏にある。そのため、十分な心の準備をする前に、智也はその家の前まで来てしまった。
呼び鈴に伸ばす手が震える。
小夜美は、いるだろうか？　いたとしても、逢ってくれるだろうか？
怖かった。だけど、智也はもう逃げなかった。
そばにいてくれる人たちの想いに、支えられていたから。
人差し指を、押し込む。ピンポーン、と軽い音が響いた。
しばしの沈黙。そして。
「はーい」
その声に、智也の心臓は激しく高鳴った。心音が外まで聞こえるのではないかと思った。
足音が玄関に近づいてくる。このドアのすぐ向こうに、小夜美がいるはずだった。

『どなたですか？」
喉がからからに渇いて、声がなかなか出せなかった。智也は震える声で、あの日のように、名乗った。
「み、三上ですけど」
「みかみって……智也⁉」
小夜美が息を飲むのがわかった。
だが次の瞬間、智也の予想を裏切って、扉はすぐに開かれた。
そこに立っているのが本当に智也なのかどうか確かめるように、小夜美は智也の全身を眺めた。そして、安堵したような、泣き出しそうな、不思議な笑顔を浮かべた。
もっとも、智也自身も同じような顔をしていたかもしれない。
『どうしたの？」
小夜美の問いかけに対して、智也は黙って唯笑からもらったチケットを差し出した。
「これ……？」
「小夜美と、行きたいんだ」
小夜美が智也の顔を見上げる。戸惑いが、隠しようもなく表れていた。
「今度の日曜日、小夜美と一緒に行きたい」
小夜美の目をまっすぐに見て、智也は繰り返した。
小夜美もまた目を逸らさず、智也を見つめた。云うべき言葉を一所懸命探しているように、何度か口を開きかけては唇を噛みしめた。
その様子に、智也は小さく微笑んだ。
「返事は……あとでいいよ」
智也の言葉に、小夜美はついほっとため息をついてしまった。慌てて申し訳なさそうに智也を見上げたが、智也は笑顔のままだった。

「ん……わかった。じゃあ……あとで電話するね」
「いや……俺が、電話する」
「え？」
「俺が、土曜の夜に、電話するよ。そのとき……返事、聞かせてほしい」
「う、うん……」
小夜美は少し気圧される感じで、頷いた。
智也は最後にもう一度微笑むと、別れを告げた。
「じゃあ、今日はこれで。急にごめんな」
「ううん……。じゃあ……」
ありがと。うつむいて云った小夜美の最後の言葉は、智也には聞き取れなかった。
智也の姿が見えなくなっても、小夜美はしばらくそこに立ち尽くしていた。

＊

智也は夕方からずっと、電話の前に座り込んでいた。
今日が、約束の日だ。電話をかけて、小夜美の返事を聞かなければならない。
受話器を取っては、戻す。途中までボタンを押し、受話器を置く。
そんなことを、もう何度も繰り返していた。
（自分から電話するなんて……大見得切っといて……）
己の不甲斐なさに渇を入れて、智也は受話器を取り上げた。今度こそ、と決意を込めてダイヤルボタンを押そうとしたとき。
玄関のチャイムが、鳴った。
その絶妙なタイミングに、思わず智也は受話器を戻してしまった。

肩を落として、ため息をつく。
もう一度、チャイムが鳴った。
「……なんだよ、こんな時間に」
憮然とした表情で玄関まで歩き、乱暴な手つきでドアを開け――、言葉を、失った。
「……やっ」
いつもの照れ笑いを浮かべる小夜美が、そこにいた。
「小夜美……」
「えへへ。電話……待ちきれなくなっちゃって。来ちゃった。悔しいけど……今回は、あたしの負けかな」
「……」
智也は何も云わず、小夜美を抱きしめた。
小夜美も智也の背にそっと腕を回した。
「……好きだ、小夜美」
「……うん」
「小夜美に……そばにいてほしい」
「……うん」
ずっと……ずっと一緒にいたいんだ、小夜美と……」
「うん……うん、わかってる。わかってたよ、そんなこと……」
「わかってた……？」
小夜美は少し体を離して、智也の顔を見上げた。微笑むその瞳から、涙の雫が流れた。
「うん、わかってた……。だって……あたしも、そう思ってたから……」
「小夜美……」
目を閉じた小夜美に、智也はそっと口づけた。
優しく、短いキス。
見つめ合ったあと、小夜美がいたずらっぽく微笑んだ。
「改めてよろしくねのキス？」
「二度と離さないのキス」

「……うわぁ、気障。似合わないよー」
「……ちぇっ」
「うそうそ。明日はまたマリンパークだね。楽しみ」
「……ジェットコースターは三回までな」
「うっそお。五回は乗らないとモト取れないよぉ」
「三回乗れば取れる……って、なんで行くたびに乗る回数増えてるんだよ？」
「あはは。ばれたか」
「……ったく……」
どちらからともなく、ふと夜空を見上げた。
冬の空は澄み切って、星々が冷たい瞬きを放っている。
智也は、そっと小夜美の手を握った。
小夜美は微笑んで、智也に寄り添った。

Memories Off
Scenario for
KOYOMI　KIRISHIMA
"I LOVE YOU"
end

あとがき
または作品解題のようなもの

とりあえず完結、です。
いろいろ不満はありますが、これが今の私の精一杯というところです。
こういう連載みたいな形にしたのは初めてだったので、ちょっと余韻に浸ってたらたら書いてみたいと思います。

ゲーム本編の小夜美シナリオに不満を持たない人は、あんまりいないと思います。あまりにあっさりしすぎていますからね。もっと悩めよ！というのがこのお話を作った発端です。
まず彩花のこと。ゲーム中ではほとんど何のトラウマでもない感じでしたが、やはりこのことはちゃんと乗り越えておかなければいかんだろうと。
もうひとつは年の差ですが、このギャップを出すには、小夜美ねーさんの大学生活を描かないといけないんですよね。そちらはあまり踏み込む余裕がなかったので、すれ違いがちのつきあいで不安になって、つい彩花のことを思い出してしまう……というきっかけとして使うにとどめてしまいました。智也が歳の差に悩むのは、小夜美ねーさんが就職してからでしょう、きっと（笑）。
最後が、唯笑とのけじめ。これはまあ他のシナリオでも同様なんですが。とにかく智也はもっと唯笑を大事にしろと云いたい（笑）。
読んでいただければわかるとおり、ほぼ一貫して智也視点で描いています。

当初は小夜美ねーさんの葛藤とかも書くつもりだったんですが、どうやってもそっちの方向には動いてくれませんでした。私の中では、小夜美ねーさんというのはそういうキャラではないようです。
悩まない、という意味ではなくって（笑）。きっと、智也とつきあうと決めた時点で、彼女は踏ん切りも覚悟もできていたんだと思います。
小夜美ねーさんが智也に弟を重ねて見ないようになるためには、小夜美ねーさんの心情の変化ではなくて、智也が「男」になることが必要だったと。そういう風に考えています。

各話に他のヒロインがひとりずつ出てくるのは、最初から狙っていたわけではないんですが、意外にうまくはまりました（笑）。詩音とみなもの役割が（台詞も）かぶってるんじゃん、と思われるかもしれませんが、微妙に違うんですよ。うまく表現できていればいいんですが……。
彩花は、意識して出しませんでした。彩花の幻（幽霊というとあまりに情緒がない）が出てきて、許してくれる、というのはずるいと思ったので。唯笑の台詞ではないですが、彩花のせいにしてはいかん。
それに、許してもらう必要はないんですよね。彩花は、もういないんだから。許すも何もない。そのことを、智也が受け入れさえすればいい。
かといって、ゲームの詩音シナリオのように『過去でしかな

い」と云いきってしまうのも、なんか寂しい気がしまして。囚われてはいけないけれど、忘れてもいけないと思う。
なので、最終話に「Memories Off」とつけたのは、ひょっとしたら間違いだったかもしれません（笑）。
ここで各話についてコメントを少々。

●第一話　僕と生きることが君のしあわせ
タイトルは『ああっ女神さまっ』のイメージアルバム（っていうのかな？）「Singles+」所収の歌からいただいています。タイトルからは想像もできないほど悲しい歌です（涙）。その内容を踏まえて、このタイトルをつけています。
あらすじを考えたとき、各話に一応テーマを設定してまして、第一話は「幸せな日常」でした。全然違いますな（笑）。ほんとは第一話はラブラブな話にして、それがちょっとしたことで崩れる、という展開を考えていたんですが、ラブラブな話にするとどうしてもじみぃさんの「恋しさとせつなさと力強さと」に似てしまいそうだったので、最初っから重い話にしてしまいました。

●第二話　なみだの意味
これも同上「Singles+」からいただいています。
二話のテーマは「すれ違い」。気持ちが噛み合わなくなる過程、です。
プロット段階ではかおるはもっとお気楽な感じで、「それって運命ってヤツ？」という風に智也を冷やかして、智也がその言葉に動揺する……って感じでした。最近、自分の中でかおるの地位が上がっていまして、そのせいか、役割が少し変わりました（笑）。

●第三話　きみを変えられない，ぼくが伝わらない
これもまた『ああっ女神さまっ』です。三女神の声優さんたちのユニット「Goddess Family Club」の歌です。この話では、唯笑の気持ちを表すものとしてこのタイトルをいただきました。
三話のテーマは「決定的な誤解」。でもむしろ、唯笑のほうが重要でしたね。

●第四話　This may be the last time we can meet
これは説明不要だと思いますが、彩花の歌です。本来、前向きなメッセージが込められた歌ですが、あえてネガティブな意味で使わせてもらっています。小夜美ねーさんに「これが……最後のデートだね」この台詞を云わせたくて、「かれかの」はできたからです（笑）。
四話のテーマは「破局」。そのままです。
智也が自分にシーツを掛けてくれたことを知って、朝からご機嫌の詩音がちょっとかわいいと思ったりしてます（↑バカ）。

●第五話　Memories Off
これも説明不要ですね。ちょっと話がそれますが、「Memories Off」って、厳密にはどういう意味なんでしょうね。私ははじめ「忘れてしまうこと」なのかな、と思っていたんですが、今では、「記憶を思い出に変えていくこと」なのかな、なんて思ったりしてます。そういう思いを込めて、このタイトルにしました。
五話のテーマは「再生」です。みなもの台詞は、自分で書いてつらかったです（涙）。
実はプロット段階では、彩花が登場していましたが、上記の考えに基づいて遠慮してもらいました。

なんかいっぱい書いてしまいました（笑）。

タイトルとは裏腹に、「彼」は「彼女たち」に救われてばっかりでしたが（笑）、最後の彼の勇気が、彼女たちみんなの救いになっていれば……いいなあ、と思います。

ご感想など、いただければ幸いです。

二〇〇一・四・一〇

八神大輔